関西大学国文学会彙報

一、令和4年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

令和4年4月20日(水)　2年次生就活・卒論セミナー
7月23日(土)　第1回国文学会研究発表会（後掲）
9月22日(木)　3年次生就活・卒論セミナー
11月24日(木)　院生合同学術研究大会
12月10日(土)　第2回国文学会研究発表会（後掲）
令和5年3月23日(木)　新2年次生対象専修別履修ガイダンス
（国文学会主催ポスターセッション併催）

二、関西大学国文学会研究発表会

◇第1回国文学会研究発表会

日　時　令和4年7月23日（土）午後2時より
会　場　関西大学第一学舎五号館　E402教室
総　会
研究発表
「三島由紀夫「女神」論―「秩序」と破滅の二元論からの考察―」
本学大学院博士課程前期課程　李　逸飛
「「推量」の意識史」
日本学術振興会特別研究員　古川　大悟

◇第2回国文学会研究発表会

日　時　令和4年12月10日（土）午後1時より
会　場　関西大学第一学舎五号館　E403教室
研究発表
「『Iwaya Sazanami's Japanese Fairy Tales』考―北星堂版について―」
本学大学院博士課程後期課程　岡本　梓
「井上靖『楊貴妃伝』論―権力と女性の力学―」
本学大学院博士課程前期課程　毛　鋼
「自慢の言語表現の語用論的分析」
本学大学院博士課程前期課程　中内　遥
「『琴歌譜』「茲都歌」―『貫之集』二一番歌への享受―」
本学大学院博士課程後期課程　福原佐知子

三、関西大学国文学会研究発表会　発表要旨

◇第1回国文学会研究発表会（7月23日）

研究発表
「三島由紀夫「女神」論―「秩序」と破滅の二元論からの考察―」

李　逸飛

（本号掲載ゆえに省略）

「「推量」の意識史」

古川　大悟

本発表は、文法的意味としての「推量」（和語「推し量り」も含むが、以下「推量」と略記する）という概念が、歴史的にどのように自覚され認識されてきたのかを立論したものである。中古の歌学から、中世の連歌論・テニヲハ論を経て、近世の国学までを対象としており、いわゆる国語学史の論として位置づけられる。

中古～中世前期には、歌合の判詞や注釈書類において、助動詞ラムが用いられた和歌を解説する場合に「推量」が現れる。現前する確実な事態とは対照的な、想像・空想に基づく不確かな事態が述べられた表現について、詠み手の「推量」であるという意識が働いていたようである。その後、中世後期の連歌論書・テニヲハ論書では、助動詞ラムや係助詞ヤの種々の用法の中で、確実な根拠に基づいて導かれる合理的な推論を表す場合が「推量」と称されている。中古～中世前期の「推量」は事態の不確実性に主眼があったが、中世後期には逆に、根拠の確実性に焦点が置かれているものと解釈される。近世に入ると「推量」の定義に揺れが生じ、「ヤ……ラム」のような疑いの表現や、未実現事態を表す助動詞ムなども含めて、広く「推量」という説明がなされるようになる。ここにおいて「推量」は現在のように多様な助動詞の意味を包摂する用語となった。

本発表では、以上のように「推量」をめぐる自覚・認識の歴史を素描した。発表者は古代日本語助動詞の意味記述を研究課題としており、本発表で明らかにしたことを今後、助動詞の意味的体系性の究明に生かすことが求められる。

なお本発表の内容をもとにした論考が、『「推量」認識の史的展開』という題で、『国語語彙史の研究　四十二』（和泉書院、二〇二三年）に掲載されている。

◇第2回国文学会研究発表会（12月10日）

研究発表

「『Iwaya Sazanami's Japanese Fairy Tales』考―北星堂版について―」

岡本　梓

本発表は、一九三八年に出版社・北星堂から出版された英訳日本昔話『Iwaya Sazanami's Japanese Fairy Tales』（全十二編）について、書誌情報を確認することで出版の目的を明らかにするものである。発表では、次の三点を指摘した。

①本叢書は、日本の伝統的な製本技術と、欧米最新の活字技術とを合わせて作られた書物である

②一九三〇年代の北星堂は、欧米諸国に対して、自社の優れた印刷・製本技術を顕示していた

③一九三四年以降の日本では、日本文化の発信が国策として推進されており、北星堂による本叢書の出版も、国策に沿う企画であった

『Iwaya Sazanami's Japanese Fairy Tales』は袋綴装の書物である。表紙には雲竜紙が使用されており、中央に題簽が貼り付けられている。北星堂の広告によれば、本文にはニューヨークから入手した欧米最新の活字（アルファベット）が使われている。一九三〇年代の北星堂出版目録からは、当時の北星堂が、優れた活字印刷技術と製本技術とを特色とし、欧米諸国に対して顕示していたことが分かる。また、北星堂は一九三四年以降、日本文化紹介書の出版に注力しており、『Iwaya Sazanami's Japanese Fairy Tales』も、日本人の国民性を紹介する書物であると紹介している。北星堂による日本文化紹介は、国際連盟離脱後、日本において欧米諸国に対する日本文化の紹介が推奨された時期と一致する。つまり、『Iwaya Sazanami's Japanese Fairy Tales』は、日本の伝統的な製本技術と、欧米最新の印刷技術とを融合して作られた書物であり、本叢書の出版は、日本を優れた印刷・製本技術を有する国として紹介するための試みであったと考えられる。なお、本発表は、「北星堂による『Iwaya Sazanami's Japanese Fairy Tales』出版とその意図について」という題で、『次世代人文社会研究』第十九号（韓日次世代學術Forum、二〇二三年）に掲載される。

「井上靖『楊貴妃伝』論―権力と女性の力学―」

毛　鋼

昭和三十八年二月から昭和四十年五月まで、井上の女性を主人公にした長篇歴史小説の第二作として、『楊貴妃伝』は『婦人公論』において連載された。『婦人公論』は、女性はいかにして生きていくべきかという問題を検討し続けた婦人雑誌である。井上は雑誌の読者層を意識して、敢えて女性主人公小説を書くと決心したと思われる。そういった背景のもとに書かれた『楊貴妃伝』は、『おろしや国酔夢譚』が辿りついた「年代記的手法」が使われているが、徹底した形でなく、創作と改変が随所に見いだせる。それは「女としての生き方を探」るために、井上が意図的に施した小説的逸脱と思われる。

従来の先行研究では、楊貴妃の「生き方」に焦点を当てたが、井上の女主人公歴史小説に共通する〈権力〉と〈女性〉という

テーマ、またはヒロインの身分設定である、〈権力者の妃〉というポジション自体には注目していないが、井上が描いた女主人公小説のヒロインは、例外なく〈権力者の妃〉という身分にあたる女性である。

従って、本発表では、従来あまり注目されていない、〈権力者の妃〉である楊貴妃と「権力者」である玄宗皇帝とのリレーションおよび〈権力〉構造の推移を考察して、〈女性〉と〈権力〉というモチーフから、井上靖の女性主人公シリーズの定番である〈権力者の妃〉という特異な〈女性〉の設定について分析してみた。

考察によると、玄宗を自分の運命→自分の運命でもあり一人の人間でもあった→獲物→玩具→権力の容器と、楊の認識の変化から、井上は〈権力者〉と〈権力者の妃〉の逆転されつつあった権力関係を描いた。

以上のことから、井上は楊貴妃という歴史上の人物の個性の追求に興味を持って本作を執筆したというよりは、むしろ〈権力〉と真正面から触れ合った一人の〈女性〉の生き方に関心を寄せていたといえるだろう。

「自慢の言語表現の語用論的分析」

中内　遥

（本号掲載ゆえに省略）

「『琴歌譜』「茲都歌」―『貫之集』二一番歌への享受―」

福原　佐知子

琴歌譜十一月節「茲都歌」の下句は、古事記の「志都歌」と同じ「誰にかも寄らむ神の宮人」であるが、この表現は、紀貫之によって享受されていると考えられる。貫之集二一番歌「宮人の摺れる衣にゆふだすきかけて心をたれに寄すらん」の、「宮人は誰に心を寄せているのだろうか」という発想は、「志都歌（茲都歌）」の、「神の宮人は誰に頼ればよいのでしょうか」と同じく、すでに心を寄せる相手が決まっている表現である。

琴歌譜「茲都歌」の歌譜では、上句の「みもろに築くや玉垣築き余す」までしか歌われず、「築き余す」が六回歌われる。琴歌譜「茲都歌」は、玉垣を築くように神に仕え続けることを歌うものであり、「神の宮人は誰に頼れば良いのでしょうか。いや神様にずっとお仕えします」という意味になる。貫之集二一番歌は、賀茂臨時祭（十一月）の屏風歌だが、「宮人は山藍で摺った小忌衣にゆふだすきをかけて、誰に心を寄せているのだろうか」というものである。

琴歌譜「茲都歌」も貫之集二一番歌も、祭祀の場で「神に仕える宮人」を詠んだものであり、貫之は「志都歌（茲都歌）」や古語拾遺（崇神天皇条）の、「宮人」歌謡を知っており、そ

れらの表現の「宮人」と「衣」に、さらに「ゆふだすき」をかけることによって、神祇歌として「心をかける」「心を寄せる」という意味を引き出す技法を取り入れたと考えられる。

四、令和3年度　卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇令和3年度 国語国文学専修　卒業論文

〈国文学〉

赤井　閑　江戸川乱歩『孤島の鬼』論―作品の中の「異」―

浅田　晴行　曲亭馬琴による小説『椿説弓張月』の主人公である源為朝の琉球王国における天命についての考察

浅野　実悠　内田百閒「山高帽子」論

淡路　楓和　怪異する男と女―「浅芽が宿」「吉備津の釜」「蛇性の婬」「青頭巾」考―

石本　梨乃　宮沢賢治「黄いろのトマト」論

板井　晴香　夢野久作「押絵の奇蹟」論―トシ子と母をめぐって―

伊東沙耶香　『醒睡笑』論―「笑いの普遍的要素」の視点から―

稲田　有華　「八百比丘尼」の形成と展開

稲本　朋希　小川洋子『密やかな結晶』論―「わたし」が書く小説の存在意義をめぐって―

上田　未来　『源氏物語』における雲居雁に人形造形―夫・子ども達への愛情から―

植野　智絵　太宰治『人間失格』論―葉蔵と「世間」との繋がりについて―

臼井　陽向　吉本ばなな『キッチン』論―性役割からの解放―

内　俊晴　山上憶良の七夕歌について

内間　桐子　『西鶴諸国はなし』―巻二の四「残る物とて金の鍋」考―

梅本　知里　『竹取物語』と『源氏物語』の関連性について―『源氏物語』玉鬘巻における『竹取』引用を中心に―

大林　史弥　『平家物語』諸本にみる「木曽最期」

大村　彩花　山本周五郎『小説　日本婦道記』論―五編の作品同士の関係性―

小川　未来　音楽と心理学の観点から見た光源氏の恋愛―明石の君・末摘花を中心に―

小田奈津子　『仁勢物語』論―その魅力と教育現場における応用―

小畠　彩華　『西山物語』考―七郎と八郎の描写の違いを中心に―

小畠　萌華　『源氏物語』における「夢」および「夢語り」について

陰山　咲楽　三島由紀夫『沈める滝』論―ダム現場での共同生活について―

加藤　未来　『源氏物語』における父子の関係―桐壺帝・光源氏・

夕霧　親子三世代の繋がり―

河野　暁　大江健三郎「個人的な体験」論―新しい価値観の会得―

川村　菜月　紫の上と明石の君の関係性の変化

木水　豊規　梅崎春生「風宴」論―「私」が抱える〈不条理〉について―

清田　駿　『古今和歌六帖』の題と分類に関する一考察―六帖成立の問題にも関連して―

黒澤　太智　三島由紀夫『美しい星』論―一九六〇年代の家族と幸福―

林　紗也　古事記における大国主神について

九重　宏海　松本清張『点と線』論―社会派推理小説に込められた作者の意識―

小林昂太郎　『万葉集』の音について

佐伯古都音　『落窪物語』研究―王朝物語としての位置づけ―

坂下　遥　『本朝女鑑』から見る女性の目指すべき姿の変貌と時代背景

新見　莉子　太宰治「富嶽百景」論―「私」の中の富士山像―

菅　千早　『百人秀歌』の研究―配列に注目して―

鈴木　恋奈　太宰治『新ハムレット』論―登場人物と言葉と噂について―

世良　苑香　『和泉式部日記』における月の在り方

高田恵梨香　太宰治「千代女」論―「気が狂ふ」少女―

高橋　里奈　川端康成『眠れる美女』論―物語の構成を中心に―

寺本　春奈　『雨月物語』「菊花の約」におけるドラマチック性についての考察

冨永　早紀　中勘助『銀の匙』論―教育観をめぐって―

仲村　天音　日本の昔話における異類婚姻譚について

中村　勇二　『土佐日記』の歌学―『古今和歌集』仮名序との比較から―

西　更紗　坂口安吾「青鬼の褌を洗う女」論―「天然自然の媚態」をめぐって―

西村　日菜　『宇治拾遺物語』「児ノカイ餅スルニ空寝シタル事」再考

布本　瑞実　登場人物から見る『世間娘気質』

野々村　廉　『大和物語』の独自性―『伊勢物語』第23段と『大和物語』第149段の比較中心に―

早川　裕菜　定家と式子内親王の物語は如何に展開したか

東良　千聖　室町時代物語『玉水物語』について

久田　幸輝　『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』における

主人公の造形

藤本　春月　『源氏物語』における花散里の存在意義―養子の養育に着目して―

古屋　奈海　『和泉式部日記』の自作説再考―「草」と「月」の描写を中心に―

堀　有紗季　高村光太郎『道程』論

南岡　里奈　朱雀院と「心の闇」―『源氏物語』朱雀院論―

村上　詩織　万葉集における雨―春雨・時雨を中心に―

村山　竜　鈴木三重吉「桑の実」論―恋愛関係に発展しない原因に関して―

森本　桜香　谷崎潤一郎『痴人の愛』論―ナオミのサクセスストーリー―

森本　悠里　弘川寺散歩―西行をたずねて―

山口日菜子　芥川龍之介「雛」論―雛人形の持つ役割について―

山田　真大　「桜桃」論―桜桃再考―

山出　瑞歩　澪標巻「かやうの人」と「思ふさまにかしづきたまふべき人」について―『源氏物語』における後見制度から―

山本　七海　六条御息所と明石の君―「伊勢の御息所にいとようおぼえたり」の意味―

山本　悠介　『今昔物語集』に於ける「孝」―震旦部・本朝部の比較を通じて―

生田　陸　永井荷風「すみだ川」論―長吉の人物像に関して―

谷脇　優介　桃太郎と翻案作品

〈国語学〉

赤尾　佳昭　ドラマや漫画におけるオネエ・オカマキャラの創出

足立　美咲　「萌え」「神」「尊い」の新用法について

伊藤結衣子　「軽率に」の新用法の使用実態と許容度について

今井　葉月　歌詞表記における漢字と記号

上野さゆみ　重言の使用実態

上原　瑞希　聖書協会共同訳における「美しい日本語」―新約聖書ヨハネの著と「ヘブライ人への手紙」を例に―

太田　花菜　YouTubeコメント欄の口論談話の分析

貝塚　太一　M-1グランプリにおける〈ツッコミ〉の多様性と変遷

小松明花梨　ヒットソングの歌詞におけるオノマトペの変遷

多田　歩未　非漢字圏日本語学習者への漢字語彙の読みの習得に関する指導法

田中　聡子　誤用の定着とパターン

谷　瑞稀　国語読本における踊り字の変遷

栃尾　陽香　方言イメージの変遷―博多弁の「かわいい」イメージの形成と浸透―
永野　柚葉　「～しか勝たん」の使用の動態
西河　利紗　大阪若年層における和泉方言の動態
浜浦　伊織　曖昧な発音と表記揺れの関連性
平山ひより　ニュースのアナウンス音声におけるピッチの変遷
藤田　知音　『らんま1/2』におけるオノマトペ表記―ひらがなとカタカナの使い分け―
藤原　修也　文学作品における感情表現の比喩―「喜」「怒」「哀」に使用される比喩―
松本菜々子　SNSを介したあいさつ表現の多様化
眞鍋　忠彦　認識のしやすさでみる数字の語呂合わせ
山上　謙一　「同音の漢字による書きかえ」の使用実態
山下　桜花　連体助詞「の」における日韓対照研究
吉井　大晟　「ス体」敬語の許容・容認度の傾向についての研究
上畑　夏実　「安定」の意味変遷について
釜本かなで　万葉集仮名主体巻における万葉仮名の字義を意識した字母選択について
中内　遥　自慢談話の語用論的分析

◇令和4年3月期　修士（文学）取得論文

〈国文学〉

岡本　梓　巌谷小波『和英対訳日本昔噺（Iwaya's Fairy Tales of Old Japan）』に関する書誌的考察
勝矢　裕貴　『源平盛衰記』巻三十五「粟津合戦の事」―木曽義仲の最期―
巽　百花　御伽草子『一寸法師』考―捨てられた申し子について―
山口　駿　『宇治拾遺物語』第三話「鬼に瘻取らるる事」再考
曹　露月　『朧月猫の草紙』における猫に関わる表現について
何　仁武　村上春樹『スプートニクの恋人』論―自己認識の行方―
中島　葵　福永武彦「廃市」論―《掘割》の象徴性をめぐって―
橋本こころ　川端康成「舞姫」論―戦後の舞姫と川端康成―

〈国語学〉

呉　文傑　外来語「クレーム」と「クレーマー」―意味用法の相互関係―

◇令和4年3月期　博士（文学）取得論文

〈国文学〉

三原　尚子　俳諧における「受容」の諸相―芭蕉顕彰活動ならびに個人句集刊行の実態―

鄭　芝婎　ラフカディオ・ハーン　中国への関心―神話、宗教、怪談をめぐって―

〈国語学〉

徐　茂峰　『節用集』の漢字字体

辻岡　咲子　依頼表現のバリエーションに関する対照社会言語学的研究